

夜

横田瑚子

寒さが残る春の夜は、

手を繋いでいるような温もりと、

空っぽの部屋みたいな冷たさが混じりあって、

なんだかすこし気持ちが悪かった。

泥水みたいに濁った夜の帳に、

ドロっとした曖昧な空気が充満していた。

高架下に佇む黒い湖を見つめていると、

彼は僕に生ぬるい手を伸ばして、

なんだか官能的に頬を撫でた。

誘惑された桜の花びらたちは、

彼の汚い水に沈んで、

彼女たちの美しさは汚れになった。

彼に滲んだ醜い月は、

遠い記憶の中で失った誰かのようだった。

夜に嫉妬した光が晒した彼は、

夜道を寄り添う影のような顔をしていた。

彼に殺された彼女たちの死体は、

片目を潰して見ないふりをした。

遠くで唸る車の音も、

ずっと孤独な高架線も、

全部が僕の味方をしてくれた。

誰も僕を証明できないぐらいに、
彼らと一緒に夜に溶けて、
温く汚く、混ざり合いたかった。

街灯が僕の肩を撫んだけれど、
彼の手の感触とは違う、

錆びた鉄のような冷たい手だった。

彼の吐息が僕を溶かして、

僕と夜の境界は曖昧になった。

彼に抱かれて、僕は夜と一つになった。